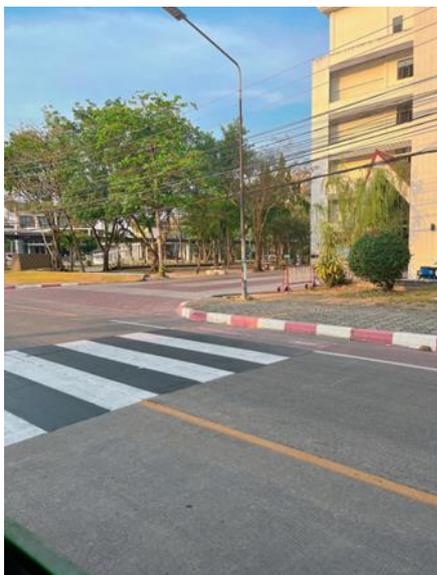


国際交流基金助成事業報告書

3年次生 岡田 櫻良

1、はじめに



2023年3/1-3/25にかけてタイのシーナカリンウィロート大学に、交換留学生として訪れました。大学には二つのキャンパスがあります。メインキャンパスは主に文系でバンコク市内にあります。薬学部は理系キャンパスということで、バンコクから100キロ以上離れた緑豊かな土地に門戸を広げていました。

大学内はとても広く、毎日無料のバスで学部に通っていました。レストラン、カフェ、マッサージ店などバスの範囲で沢山の場所に行けました。寮の横にはセブンイレブンもあり、寮の下は簡易的な食堂だったので、何をするにも困ることはなかったです。

2、ホームヘルスケア

留学の中期に、家族全員が統合失調症という家庭を二つ訪問しました。そのどれもが服薬がうまく行っておらず、薬剤師はそれを記録してお医者さんに伝えるために動画をとったりや色んな声色での会話を試みていました。

320錠の処方箋で4錠しか飲まれていなかったのを見た時は、患者さんの多弁も相まって悲しい気持ちになりました。この取り組みはタイでもこの州特有だという話も聞きました。



3、医者の常駐しない病院/ストレッチャーのあふれるタイ一番の病院

ピンクの壁が賑やかな病院はイスラムの患者さんがたくさんおとずれ、月に数回ほど

くるお医者さんを待つために外には椅子がずらりと並んでいました。

もう片方の病院はさらに人が多くいました。みんな医師が来る日を心待ちにしているようでした。

どちらの病院も基本的に高血圧、高脂血症、糖尿病など決まりきった病気の薬に特化して薬は保管されており、そこではディスペンス作業の練習をしました。

翻ってマヒドン大学のラマトバディー病院はホールにストレッチャーあふれてはいまし



たが、とても綺麗で最先端の化学療法を見せてくださいました。

4、クラス

製剤の授業がおもでした。溶出試験や崩壊試験、実際に打錠機のセッティングをしたり、時には軟カプセルも作りました。

試験で習ったことが山ほど出てきて、より実践に近いことが体感できたのが非常に興味がそそられました。クラスはタイ語でしたが、タイの友人たちが英語に直してくれたので、



そんなに困ることはありませんでした。

5、ご飯

新しくできた友達や、先生方がたくさんご飯に連れて行ってくれました。大きな川魚の丸揚げや、モリンガの天ぷら、もう食べたことのないものが山ほどあって、毎日違うものを食べていました。

ただ私は辛いものが得意でしたが、生唐辛子は胃が受け付けず、大変な思いをいたしました。セブンイレブンに売っている黒いカプセル薬がよく効いたのですが、売り切れも多くてドキドキいたしました。生水は口にいれませんでした。大学内の屋台の食べ物でお腹をこわすことはなかったです。

6、ドミトリー

八人が2段ベッドで寝られる部屋に、赤いシーツがかかっていました。女子二人は同室で、男子は隣の部屋でした。机や椅子やドライヤーはなく、ただ外に冷蔵庫があって助かりました。

タイは、40年前の日本といわれますが、上下水道もそのような趣があり、サンダルを買いに行ったり、自分たちで沢山の工夫を凝らしました。

タイ人は怖い話をし合うのが好きなようで、この寮に関しての噂をキャーキャー言いながら耳を塞ぐのも良い思い出となりました。

あと寮内には猫もいました。



7、最後に

こんなにも充実して楽しい時間をありがとうございます。

先生方は優しく、生徒のみんなもとってもフレンドリーで、何度もご飯を食べに行きました。教授のアシスタントの方がまるでお兄ちゃんのように優しくしてくれ、本当に心からのびのびと経験を吸収することができました。

大阪医科薬科大学の海外交流の更なる発展とマヒドン大学との新しい提携がうまくいきますように、心から応援いたします。

この度は本当にありがとうございました！

